

演者 ○木下恵(看護師) 吉本敦子(看護師) 平川英里(看護師)
毛利敏恵(看護師) 阿部亜由美(看護師) 田村政子(看護師)

概要

【研究背景】

高齢者の増加に伴い認知症高齢者も増えている。2025年には5人に1人が認知症と言われている。認知症の先行研究にはBPSD支援・パーソンセントラードケア・自己効力感・職場環境などがあつたが、多職種を対象にした研究は少なかった。病院で働く看護職・介護職・セラピストを対象にして比較した研究はなく、認知症高齢者との関わりや意識について知りたいと考えた。

【研究目的】

看護職・介護職・セラピストの認知症高齢者への対応と意識や職場環境・自己効力感を明らかにする。

【研究方法】

期間：平成26年5月～10月
対象：A病院 看護職・介護職・セラピスト
計161名 有効回答者140名
アンケート調査：1回 無記名自記式「認知症高齢者に対する包括都市生活支援；大阪プロジェクト」の調査票を参考に作成
調査内容：対象の基本属性・BPSD支援・パーソンセントラードケア・職場環境・一般自己効力感
検定方法：クラスカル・リス検定 Steel-Dwass法 $m \times n$ 法 ($P < 0.05$ 有意差あり)
倫理的配慮：A病院の倫理委員会で承認を得た。

【結果・考察】

セラピストは20歳代・30歳代がほとんどで経験年数5年以下が多く、看護・介護職は、経験年数は5年以上がほとんどだった。

BPSD支援・パーソンセントラードケアについては3職種とも80%以上が「できる」「している」と答えていた。「長く徘徊する高齢者に対して水分補給を促すなど、高齢者の健康に配慮することが出来るか」「夜遅くまでおきている高齢者に対して、話し相手になるなど無理に寝かせない対応を行うことが出来るか」で介護職はセラピストより優位だった。パーソンセントラードケアに関する項目では

「介入の際に高齢者の自己決定を尊重しているか」は、セラピストが介護職より優位「日常生活支援において高齢者の持っている能力を発揮できる場を作っているか」では、セラピストが看護職よりも優位だった。

職場環境の項目では、70%以上の職員がよいと思っていた。「あなたの直属の上司は、仕事のことで困っているとき相談に乗ってくれるか」「あなたの所属部署では、職員一人一人が個性を発揮している」などを含め5項目についてセラピストは看護職より優位だった。セラピストは終業後のフォロー体制があるために優位になったと考える。自己効力感では3職種に有意差はなかった。

3職種ともBPSD支援とパーソンセントラードケアに対する意識が高く、それぞれの職種間の有意差は業務の違いによると考える。BPSD支援とパーソンセントラードケアに対する先行研究では職場環境がよいと自己効力感が高いと言われ、また自己効力感が高いほどBPSD支援ができると言われていた。しかし、今回の研究では3職種ともBPSD支援・パーソンセントラードケア・職場環境の結果がよいのに対し、自己効力感が高くなかった。3職種とも自己効力感を高めるための多様なサポートが必要である。自己効力感を高めることが、さらに認知症高齢者のケアの向上につながると考える。

本研究の限界として、対象が少なく一人の回答が、有意差に影響したと考える。自己効力感を規定する要因を探ることが、今後の課題といえる。

【結論】

1. 認知症高齢者に対する3職種の意識は高かった
2. 3職種ともBPSD支援・パーソンセントラードケア・職場環境の結果がよいのに対し、自己効力感は高くなかった。

